◆荒井類　選

《「巨人大鵬卵焼」を知っているかな》

四月来る盤水巨人玉子焼　　蟇目良雨

盤水とは皆川盤水のことであり、蟇目良雨の師である。この句の意味を理解するには、その師弟関係と、「巨人大鵬玉子焼」を知らないといけない。

大鵬は一九六〇年（昭和三十五年）の十一月場所で初優勝し、一九七一年（昭和四十六年）五月場所で引退を決意する。プロ野球セントラル・リーグの読売巨人軍は、長嶋茂雄・王貞治のＯＮ砲に加えて、川上哲治が監督に就任し、一九六一年（昭和三十六年）六年ぶりに日本シリーズを制覇した。一九六五年（昭和四十年）から一九七三年（昭和四十八年）にかけて、同チームは、日本シリーズ九連覇（Ｖ９）を成し遂げた。「巨人大鵬卵焼」という言葉は、昭和四十年代前半から昭和四十五年頃の昭和の文化を背景にして誕生した流行語だとされる。その当時の子どもの好きなものを並べて、時代風潮を表したのであった。

それを前提に掲句を見ると、要するに作者の好きなものを並べた体である。師匠への敬愛の念が感じられる一句だが、「巨人大鵬玉子焼」をもじった表現を用いたことで、滑稽味が出た。掲句の出典は、蟇目良雨句集『九曲』（東京四季出版）。

《「「こまっちゃうナ」のメロディーが・・・・・・》

困っちゃうなあチユーリップ咲き切って　降旗牛朗

波多野爽波が〈チューリップ花びら外れかけており〉と詠んでいるように、チューリップは花びらの一片一片が大きい。だから、チユーリップが「咲き切つて」しまうと、「困っちゃう」のである。

掲句に接して、ある年齢以上の人の頭の中には、山本リンダが歌って大ヒットした「こまっちゃうナ」（作詞・作曲、遠藤実）のメロディーが聴こえてきたに違いない。実に面白い一句である。（出展は、「俳句四季」２０２０年７月号）。

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

《春の気分を表している「ぬーぼー」》

行く春やぬーぼーとしてヌーヴォーに　　高橋透水

ここにいう「ぬーぼーとして」の「ぬーぼー」とはどういう意味だろうか。〈ヌーボー(フランス nouveau)〈ヌーヴォ〉１アールヌーボー　２(形動)(ぬけてぼうっとしている様子を外国語に託していったもの)動作や顔付きなどがつかみどころのないさま。また、態度が鷹揚でこせこせしないさま。〉(『日本国語大辞典』)。

掲句の「ぬーぼー」は右の２の意味だろう。「ぬけてぼうっとしている様子」に由来する言葉をもってきたことで、春の気分が表されている。

カタカナの「ヌーヴォー」は、フランス語で〈新しい〉という意味である。ボージョレ地区で、その年に収穫された新酒の「ボージョレ・ヌーヴォー」は、日本人もよく知っているフランス語である。

掲句は、「ぬーぼー」「ヌーヴォー」のリフレインが楽しい。「行く春や」と、春を惜しみつつ、ぬけてぼうっとしている様子で、ワインに酔ったような気分……、なんとも滑稽な景である。滑稽性、諧謔性は高い。

《「ダジャレ」ではなく「the（ザ）シャレ」》

蝶々が我を結びてゆきにけり　　山田知明

蝶々が、自分のまわりを飛んでいったのだ。それを〈蝶々が自分を「蝶々結び」していった〉と捉え、表現したことで、「滑稽俳句」が誕生した。

こういう機知に富んだ表現は「ダジャレ」ではなく「the（ザ）シャレ」と理解すべきである。

《桜の樹の下には屍体が埋まっている》

黒い猫白い猫にも桜散る　　野村泰司

俳句と何も関係を持たないわが妻は、「黒い猫でも白い猫でも、そこにうす

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。

いピンクの桜の花びらが散れば、きれいよね」と言い、筆者は「そうだね」と答えはしたが、実はもっと深読みをしている。

「桜の樹の下には屍体が埋まっている！」。これは梶井基次郎の『桜の樹の下には』の書き出しである。つまり、掲句の桜の木の下にも「屍体が埋まって」いて、その樹の下に「黒い猫白い猫」がいると読んだのである。お弔いには、「黒と白の幔幕（＝鯨幕）」が必要だ。ブラック・ユーモアだと読んだ。

《オノマトペの使い方が上手い》

たんぽぽのお喋り止まぬぱぴぷぺぽ　　百目鬼英明

春の季語「たんぽぽ」といえば、「たんぽぽ」の「ぽぽ」を使った次の二句が思い浮かぶ。

たんぽぽのぽぽと綿毛のたちにけり　　加藤楸邨

たんぽぽのぽぽのあたりが火事ですよ　　坪内稔典

前者は「ぽぽ」を「ぽぽと」の形で副詞的に使い、後者は「ぽぽのあたり」と形容詞的に使っている。

さて、掲句だが、「ぽぽ」をそのまま使うのではなく、「お喋り」の言葉のオノマトペとして「ぱぴぷぺぽ」という形で用いた。よくわかるし、滑稽味を感じさせる佳句だと思う。　　（文中敬称略）

滑稽俳句協会ホームページ掲載の画像及び、データの無許可転載はお断りします。